

とわいらいと

『まるで4人全員がダニエル・ジョンストンのようなバンドだ!』

誰が買ってるんだか読んでるんだかもわからないようなファンジン誌の音楽ライターが僕らのことをそう記事にしたことがあったけど、僕はそれを間違いだと思う。勝手に直すなら『ボーカル以外のメンバーがダニエル・ジョンストンみたいなバンド』だ。

最初から気付いていた。ボーカルの僕以外、みんな天才だった。だから僕は彼ら3人の天才が織り成す音を分かりやすい言葉にして説明、つまり歌を通して客席に伝える必要があった。必要、そう考えれば、僕があこのバンドにいた意味があったって思えるんだ。

僕らが最後に作った曲に『とわいらいと』ってのがある。結局ライブでは1度きりしかやらなかった。でもきつと『とわいらいと』はその1回だけのために作られた曲だったんだ。1回しかできない曲、1回やったらあとは影も形も残らない曲。1回しか経験できない曲。なんだか『時間』に似ているね。そうだ、『とわいらいと』は僕らの『時間』そのものを表していたんだ。

僕は今でも思い出す。僕ら4人は出番を次に控えて、楽屋でステージを映すモニターを見てた。だけどまだセットリストは6曲だけしか決まっていなくて、MCが入る予定の2曲目と3曲目の間か、ラストの6曲目と5曲目の間、そのどこかで『あの曲』を入れる。そういうことになっていた。きつかけは4人のうち誰からでもいい、分かりやすく合図する。目線でも声でもなんでもいい。そしたら、ギターのイントロフレーズがきつかけで『あの曲』を、やる。

モニターからは僕らの前のバンドのラストから2曲目の演奏が弱く楽屋に響いていた。

「ちよつと行ってくるわあ」

突然、そう言つてフジイくんがふらふらと楽屋から消えた。

「トイレかな?」僕がそう聞くと、チューニングを確認しながらギターの岸くんが「うん、どうかなあ」と生返事を返した。僕は広げた歌詞カードにまた目をやった。不安が残っていた。

「:おいおいおいおいっ!! ヤハハハ!!」

ドラムの吉田くんが悲鳴にも似た声を上げたあとに地面で笑い転げた。

「ど、どうした!?!」僕が聞くと

「ひいゝ！ハハハハハハ!! あいつ、阿呆や。アハハハハハハハ!!」

吉田くんの指差した先のモニターに、にこにこ笑うフジイくんが映っていた。

フジイくんは演奏するバンドのベースの耳元で何か言っていると、ベースを奪い取って指で激しく弾き始めた。(終演後に聞くと、フジイくんは演奏する彼の耳元で「ちよつと貸してえ」と言ったらしい)

バンバンベンツ　バンバンバンベンツ

ラインでもない、フレーズでもない『音』がモニターから響いてくる。

「む、無茶苦茶だ！」僕はなによりも先に、今演奏中のバンドに後で怒られないかを心配して鳥肌が立った。

「：俺も行こおつと」今度は岸くんが何も持たずに足早に楽屋から出ると、すぐにギターを奪い取ってギヤツと弾きだす岸くんの姿がモニター映った。

ギウヤア　ギヤン　ギヤンツ

リハーサルで見たそのギターのエフェクターのセッティングでは、絶対に出せないような、音が聞こえてくる。

バンバンベンツ　バンバンバンベンツ

ギウヤア　ギヤン　ギヤンツ

「ひひっ、まあ、そういうことになるわな！」よくわからないことを言いながら吉田くんまでもが楽屋から消えた。そして

シー　クタン　シー　クタン　クッククタン

モニターの先でスネアドラムも、ハイハットさえも聞こえるか聞こえないかの、謎の手数に入った4ビートを叩き出す吉田くんが映った。

(吉田くんは先に座るドラムのイスに強引に座り絶頂にも似た笑顔で「いすとりげえむう♪」と言ったらしい)

シー　クタン　バンバンベンツ　ギウヤアンツ

他人の楽器を奪ってあまりにも突然始まったセッションが塊になる。

客席は想像するまでもなくぼかんとしているだろう。何が起こったのかも把握できない空間で突然放たれた音の塊。僕はモニターをぼうつと見ながら(ああ、こいつら：天才なんだなあ)と他人事のように思った。少し胸が締め付けられた。でも、わかっていたことだ。僕は…。うつむいた。両足が震えてた。

シー　クタン　バンバンベンツ　ギウヤアンツ

シー クタン バンバンベンツ ギウヤア：

ダンツ！！

大鐘に鉄のパイプをおもいきり振り落ろしたような強いスネアドラムの破裂音がした。

音に誘われて僕は再びモニターに顔を上げた。

そして始まったのはまさか『とわいらいと』のイントロだった。

「…え？ ええええええええ！！今ああああ！！！！？？」

まさか0曲目と1曲目の間に始まるなんて思うはずもなくモニターの前でさらに震えだした僕を、マイク越しにフジイクんの叫ぶ声が聞こえた。

「幸隆ああああああああ！！ 来おおおおおおい！！！！」

薄暗闇のステージまでの細い通路を、僕の震えた足が走ってく。

ああ、そうだ。彼らが僕を連れてつてくれる。

僕じゃ到底見れないものをはつきりと僕に見せてくれる。

だから僕は：凡人で構わない。

客席の君に僕が見た世界を語ってあげる。

さあ、30分間、冒険をしよう。

「び： Bメンノーフラッシュ始めますっ！！ 1曲目。『とわいらいと』！！」
轟音が、響いた。

○○○

この中の誰が欠けても成立しない。

僕らはそういう奇跡のバランスでバンドを組んでしまっていたから、5曲入り予定のミニアルバムのレコーディング初日にフジイクんが『抜けるわあ、ごめんなあ』とメールを残して失踪したあと、僕らは分かりやすく崩れていった。

インディーズとはいえ、レコーディングや宣伝でお金をかけてもらっていた事務所

はもちろんクビになった。

僕以外の2人はすぐに音楽を辞めた。

ギターの岸くんはしばらく酒ばかり飲んでひどかったけど肝臓をやって入院してからは少しマトモになった。今は実家の舞鶴に戻って、家族でかまぼこ工場をやっている。ドラムの吉田くんはウェブデザインの特設学校を辞めてからはしばらく連絡が取れなかったけど、今は高知で農家を継いでビニールハウスでししとうを育てているみたいだ。もったいないと心から思うけど彼らの人生だ、好きにしたらいと思う。

結局フジイくんとは、あれから誰が何度連絡しても繋がることはなかった。

解散？ そんなものは発想自体がなかった。3人で集まることはあれから数回あったけれど、誰の口からも新たにベースを入れてバンドを続けようとか、音楽を続けたいという意味すら聞かなかった。

あのまま僕たちが奇跡の4人のまま今もずっとバンドを続けていたら、今とは違う人生が僕らを包んでいたのだろうか。人気とか：出ていたのだろうか。僕は布団の中に入って寝る前や、駅からの帰り道なんか未だにそれを思う。

そして、僕だけがその夢から未だに覚めなくて、今も弾き語りをやったり、小さな劇団で役者をやったりしている。だって彼らのせいで表現することの喜びを知ってしまった。

だけどもあれからずいぶんと経って、今、僕を呼ぶ声は聞こえない。

ジメジメとした楽屋から続く暗くて狭い通路を抜けてステージへは確か10メートルくらいの1本道。道を間違えるはずもない。だけど：

ようやくステージにたどり着いた。見渡した。誰もいない。ステージにも客席にも。誰もいないコンサートホール真ん中に、ぽつんと置かれたセンターマイクと息を切らした僕がいる。照明はステージじゃなく出口に当たってる。

僕の言葉は誰にだって届かない。

もう限界なんだ：

だって僕はダニエル・ジョンストンじゃない。なりたくてなれるもんじゃないんだ。やっぱ僕らの、いや、僕にとつての『とわいらいと』はあの1度きりだったんだ。

『明日、舞台、見に行くで』

突然、僕の携帯にフジイくんからメールが届いたのは、彼が消えたあの日から8年後だった。

終演後に21時に待ち合わせた新宿駅東口で、フジイくんがちぎれんばかりにこちらに手を振っている。ああ、フジイくん。頬はどうにもぼつてりとしてしまっているけれど、確かにフジイくん。8年前と同じようにコンビニの袋に財布や文庫本や衣服を無理矢理に詰め込んでいるらしく、パンパンに膨らんだそれは手を振る右手のリズムに合わせてばたばたと忙しく揺れている。きたない作業着や無精髭からは生活が滲み出ていた。

何を話そう。何から話そう。

心が踊った。溢れる人と人の間を抜けて、夏を予感させる嫌な風が吹いている中でも途端に心が休らいた。そうだ、似合わないけれど今日は僕からもちぎれんばかりに手を振り返そう。

「おおくくくい!!」

歌舞伎町に向かう若者たちが一瞬こちらを見てから、また歩き出した。

「幸隆あ、かつこ良かったでえ」

目の前まで来た僕に、フジイくんは8年前と変わらないゆつたりとした京都のイントネーションで言った。

「ありがと。フジイくん：久しぶりだね：」

「久しぶりい。お前、髪切ってんなあ」

「うん：」

腰まであった僕の長い髪は、今はツーブロックに切り揃えられていた。少し恥ずかしくなつて、僕は立てたポロシャツの襟を元に戻した。自分が歳相応と考えていることが、変わらない彼の前ではひどく小さく見えた。

「劇場、狭くてびっくりしただろ？」

「いやあ、そんなん関係ないよお。あれからずっと続けてんのやろ。すげえなあ」

「：うん。それなりになんとかやつてるよ」

僕は言わなかった。自分が30席しかないこの小さな劇場での今日の公演を最後に役者をやめようと決めていること。弾き語りもここ2、3年、ずっと同じ曲ばかりでこれっぽっちも面白いと思えていないこと。自分が本当は何がしたいのか全く分からずに周りに流されてズルズルと29歳になってしまったこと。：クズ 僕はいつからか心のどこかで自分自身をそう評するようになっていた。いつもどこかでうしろめたさを感じている。酒の席で大笑いをしたあとも、彼女が出来た瞬間も、いつだって幸せを感じるすぐ隣で弱い電気が体を走るようにじんわりと「うしろめたさ」が滲む。

今の僕はフジイくんにはどう映っているのだろうか。

「：とりあえず飯でも食いにいく？」

「いや、俺あるからいいわあ」

フジイくんがコンビニの袋からへなへなになったスイートブルを取り出した。

「あははは！」思わず笑ってしまう。だってそんな所まで昔と変わらない。久しぶり会った友人ととりあえずビールで乾杯なんて、そんな常識は彼には通用しない。

「バス、何時？」

「一番遅いのにしたからなあ、都庁の下に：23時集合やったかな」

「そっか。そしたら：散歩でもする？」

「うん、そうしよ。幸隆、案内してくれえ」

「ええとそしたらね：うくん夜行バス乗り場があるのが西口だし、西口のほうにいた方がいいから：」

「ええよお、適当で」

「うん：じゃ、こつちに行こう！」

僕たちは靖国通りから新宿の大ガード下をくぐって、中央公園のほうに歩き出した。「幸隆あ、ここ変な道やなあ。このでかい道、歩道橋渡らんかったら向こう側行けんやん」

「うん。自転車で来ると大変だよ。担いで登らないといけないからね」

「なんでこんな道が存在すんねんろなあ。写真撮つところ。幸隆、ここなんつう場所？」

「新都心歩道橋：」

「なんかごつつい名前やなあ。しんとしんほどーきよー！ほとんど必殺技やもんなあ。やつぱ東京は変なもんいっぱいあるなあ」

「大袈裟だよ歩道橋くらいで。はは」

「：幸隆、見ろ。しんとしんほどーきよー！の向こうからオカマが渡ってくるぞ！ラ、ラスボスや、ラスボス！ギャハハ！」

「なんだそりゃ。あはは。近くに有名なゲイの街があるんだよ。新宿2丁目。聞いたことあるだろ？マジでそこら中オカマばかりだよ」

「トルネコのモンスターハウスみたいやなあ。ギャハハ！あ、俺そういえばな、この間天王寺のサウナでな、オカマに言いよられてん」

「ええっ」

「普通のハゲたオッサンがいきなりチンポ触ってくるねんもん、びっくりしたわあ」
「ふふふ。それでどうしたの？」

「物は試しにしゃぶらせてみてん」

「ええ!? ツハハハ!! そしたら?」

「一応イツといたほうが得かな思てなあ、もつと早よせえ、早よ口動かさせて言うてたらなあ、サウナで、100度くらい温度あるやろ? オッサン、早よ動き過ぎて白目向いて気失ってん」

「ギャハハハハハハ!! なんだよその話っ! アハハハハ!!」

「でな、俺、オッサンお姫様抱っこしてなあ、受付のオバハンに『救急車呼んだってくれ!』言うて、『どうした、急に倒れたんか?』て聞くから『サウナの中でオッサンが突然ハトみたいに首振り出して倒れた!』て」

「ダハハハハハハ!!」

「ワハハ。やからあれから俺な、オカマ恐怖症やねん」

「自業自得だよ! アハハハハ!! ツハハハハハ!! 絶対やだわ、おっさんにされるのなんて!」

「まあサウナ100度くらいあんなんからバイ菌持っつっても死ぬやろ」

「そういう問題じゃねーよ! ツハハハハ!!」

「ワハハハ!」

気付けば僕らは8年前に戻ったみたいにな、くだらない話で笑い転げていた。

当時、弱冠二十歳だった僕らがレンタカー屋で一番安いトヨタビッツに荷物をぎゅうぎゅうに詰め込んでツアーに繰り出せば、トヨタビッツは東名高速に翼を広げて、遠くに見える太平洋の反射した水面のキラキラとした輝きで辺りが見えなくなるほどに全てが希望に満ちた。

事故車を見つけただけで跳ねるように騒いだ。

各地で安い飯を食べて、毎晩同じセットリストで毎晩全く違う演奏をする。どこのどんなバンドにだって負けなかった。背の低い僕たち4人が織り成す、誰よりも大きな音、大きな自信。

名古屋で、見るからに腕つぶしの強そうな入れ墨だらけのお兄さんが僕らの終演後に楽屋に勝手に入ってきて「号泣したとお!!」と叫んだ日は、帰りの車内で「あいつ絶対愛知県生まれじゃねー!」なんてことを誰かが言い出して同じことで1時間は飽きもせずに笑ったつけ。

笑い声の数と時間は比例して進まない。

いつも気付けば最終日、下りの東名高速はすっかり陽が落ちて、輝いていたはずの水面はどこまでも遠く暗く、遠くでチカチカと光る向こうの街の灯りの点滅は、楽しかった旅の終わりのカウントダウンを4人に告げる。

「いやだ、まだ帰りたくない。」

「ずっとこいつらと一緒にいたい……ずっと……」

みんな眠ってしまったのか誰も喋りださない車内では、カーステレオからピコピコと電子音の入っただらけたパンクロック、XTCの「ネオンシャッフル」がバカみたいにリピートで流れていた。

「……ていうかさ、なんで今日突然来てくれたの？」

「……今なあ、俺、西院で親父と古本売る仕事してんねんなあ。東京の古書組合の交換会ってのがあって……せやな、簡単に言えば古本の市みたいなのが……まあもつと簡単に言えば……出張で、ちょうど時間が合ったからなあ」

「そっか……だから作業着なんだ」

「いや、着替えるん面倒くさくて最近毎日これやねん」

「それ私服なんだ。はは」

「でなあ、この間たまたま寺谷幸隆ってインターネットで検索したらな、東京で役者になってんねんもん。笑ったわあ。それで……まあ、携帯番号も変わってなかったしなあ」

「そっか……」

「……」

「………なあ、フジイくん……」

「んん？」

「なんであの時……」

「……」

（なんであの時突然消えたんだ。なんで何度連絡しても出なかった。君が抜けなかったら今でももしかしたら僕らは……僕はこんな……）

「……いや……いい……」

「……」

そこから15分間僕らは無言のまま、同じビルの周りをぐるぐると歩いた。もう深夜バスの集合場所の上にある都庁がすぐそこに見えている。

「フジイくんは…もうベースやってないの？」

「そやなあ…。だいぶ前に売ってもうたねん」

「そっか…」

今度は10分の沈黙。4車線道路を車は1台も走っていない。

「幸隆…」

「…なに？」

「…東京にもホームレスいっぱいおんねんなあ」

「…そうだね…」

都庁の下にバスが到着しているのが見えた。

携帯で時間を見た。22時15分。あと45分。…次はいつ会えるのだろうか。いや、もしかしたらもう会えないかもしれない…。だけどさつきから頭の中に浮かんでくるのは、昔の僕ら、それだけ。

…：…いつだったか、誰が買ってるんだか読んでるんだかもわからないようなファンジン誌の音楽ライターが僕らのことを記事にしたことがあった。そのページには半ページの短いインタビューが載っていて、見出しには『まるで4人全員がダニエル・ジョンストンのようなバンドだ！』と書かれていた。

「幸隆あ…」

「…ん…？」

「俺なあ、オカン殺してん」

「…：…え…：…」

「6年刑務所入ったつた」

「…：…：…：…：…：…」

あまりにも柔らかく耳に入ってきた京都のイントネーションに僕はデタラメな返事をかえした。言葉が間に合わなかったからだ。フジイくんがその類の冗談を言う人でないことは僕が一番よく知っている。

僕らはお互いの顔も見ずに20秒、無言で止まった。

「なんで…殺したの？」僕は沈黙を切ってもつともらしく聞いた。

フジイくんは10秒黙ってから、あまりにもあっけらかんとした口調で喋りだした。

「……………オカンなあ、おかしくなつてもうてんなあ。家の金全部よわからん団体に寄付したり、土地担保にして金借りてホームレスにバラまいたりなあ。いや、でもなあ、夕方は普通やねん。鼻歌歌いながらハンバーグ作ったりしてはんねん。なんやろ、発作っていうんかなあ、急に变なことやりだすねん。病院行つて入院してる知らん人の首絞めたりすんねん。俺、オカン迎えに行つてな、オカンなんでそんなことすんねんって聞いたたら、『選んでる』って真顔で言うねん。死んでいい人と悪い人を選んでるって言わはんねん。だから重病の病棟行つて死んでいい奴見つけたらわざわざ生かしたいら汚いから殺すつて言うねん。真剣に言つてはんねん。たまらんで？ んで、その内オトンも寝込んでもうてな…。でな……………8年前な…朝、行く時な…オカンな、寝てるオトンの首絞めとつてん。俺びつくりしてもうてなあ、オトンからオカン引き剥がして台所にあつた包丁で刺してもうてん。ほんだらな、オカン血だらけで玄関から走つて飛び出してな、隣の保育園のな、子供にな…自分に刺さつてる包丁引き抜いて切りかかつてん。んでな…俺な…気付いたらオカン殴り殺しとつてん。」

旧約聖書と新約聖書ってあるやろ？

まあ、そやな、別に知らんでええわ。…むちゃくちゃ簡単に言えばな、まあ正しい生き方を書いてはる教科書みたいなもんがあつてな。神様と人とのやくそくごとんやけど。それ、ごつつ昔に出来てるわけなんやけどな、それにはむっちゃ色んな解釈があつて、それ次第では全く別の考え方になつたりすんねんな。オカンがおかしなつてもうてからな、いつもようわからん分厚い本大事そうに持つててん。オカンをおかしくしてんのはこれなんやて思った。でもな、本当に間違つてんのかなつて疑問があつてん。オカンがしたこと、オカンが信じてること、オカンにとって大事なもの、まづはそれのどこがどう間違つてんのか俺がちゃんと理解しとかんとオカンとちゃんと話できへんのちゃうんかなあつて思て、まあ…結果はオカンが死んで俺が刑務所に入つてからになるんやけど…俺、その教科書、新約と旧約を全部自分で訳し始めたんだよ。まあ英語らよわからんし、辞書片手にやけどな。刑務所で6年間と、ほんで出てきて2年、全部で8年かかつて先週、やつと全部訳し終えたんだよ。

笑つてまうで？ 結果な…

よく分からんかつたんよ。

なあ…も分からんかつた。終わつた瞬間大爆笑したわ。長あいフリでオチがよく分からんつて、なんちゆうコントや、思てな。

…ほんだらな、急にふわつと、お前らのこと思い出してん。

なんや急に、どうしても会いたくなつてんなあ。

を感じながら生きてる！アホ！ボケ！カス！！

僕、あの時みたい面白いことをしていただけなのに！

くそっ くそがつ！！ああああああああ！！！！！！！！！！

「幸隆あ」

「……ハア……ハア……」

「俺な、もう何にもやることがないねんな」

「……どういうことだよ……」

「また……いつかお前らとバンドやりたいなあ……」

「……え……」

「あれやりたいねん『とわいらいと』」

「……で、でもあの曲は……いや……」

「お前と岸と吉田と……この4人やったら絶対おもしろいやろなあ」

「…………で、でも……僕は……お前らみたいに……」

「幸隆……お前がみんなに伝えてくれるから、俺らはずっとできてたんやで」

「あ……あ……」

「幸隆、お前は大丈夫やで」

「あああああああああ！」



フジイくんが自殺したのは僕と会った2日後の月曜日だった。フジイくんの父親が彼の携帯のメモリーから僕に連絡してくれた。

フジイくんのベッドの枕元には、買ったばかりの月の色のフェンダー製プレジジョン・ベースがあっただらしい。

薄明かりの空が、月を迎えて夜がくる。

やつぱり『とわいらいと』はあの日の1度きりしかできなくて

それは、僕たちの過ぎ去ってしまった「時間」そのものだった。

フジイくんへ

あの日君が僕に何を伝えにきてくれたのか、今でもずっと考えてる。

僕はね、あれから弾き語りも役者も全部やめたよ。

不思議だね、やめた瞬間憑きものが取れたみたいに心が楽になった。

もしかしたら君が、過去になんかとらわれるな、もうそろそろ前に進んでいいんだよってあの日言いに来てくれたんじゃないのかって思うことがよくあるんだ。良いふうに解釈しすぎかな。

でも、本当に、そう思うんだ。

今は高校で世界史の教員をしてる。まだ非常勤だけどね。地方公務員試験って案外難しいよ。勉強中。あ、そうそう、あれから1年後に結婚してさ、もうすぐ子供が産まれるよ。毎日楽しく過ごしてる。本当だ。安心してよ。

岸くんは相変わらずかまぼこ工場で働いているよ。今度いっぱい送ってくれるってさ。

吉田くんは捕まった。ニュースで「農業経営者、ししとうのビニールハウスで大麻栽培！」って流れて吉田くんの顔が出た瞬間笑い転げたよ。あいつ、無人島に一人取り残された人みたいな格好になってさ、カメラに向かってすげーにこにこしながら口をパクパクして何かを喋ってるんだけどさ、どう見ても「ファッキュー」って言うてんの。ははは。なんでだよ。馬鹿だなあ。

フジイくん

いつになるかわからないけど、今度3人で集まった時は、朝まで君の話をするよ。

フジイくん

君に、朝の陽を与えるから。

フジイくん

今度また、休みをとってお線香、あげにいくから待っててね。

『とわいらいと』

少し近くてとても遠い 旅の途中

100年だけの小さな旅人が迷子になった

泣きながら

「母さん 母さん

一人で遠くは行けないから、遠くへは行かないで」

とわいらいと うすあかり

とわいらいと 抱きかかえた記憶で灯して

風がさわいで 背中を吹き抜く 旅の途中

旅人は旅人とすれ違った 知らない言葉

あれはきつと

「母さん 母さん

一人で遠くは行けないから、遠くへは行かないで」

とわいらいと うすあかり

とわいらいと 両手と胸の温もりで照らして

だいじょうぶ

嘘じゃない

嘘じゃないよ 虫が鳴いている

「もうすぐ朝が来るぞ！」